ことぶき「なか」だより No.205

発行所　日本キリスト教団 なか伝道所
〒 231-0026 横浜市中区寿町 3-10-13 金岡ビル 203
Tel. (045) 671-1109
振替　00200 － 1 － 47369
E-Mail: naka-ch@hb.tp1.jp　http://church.jp/naka/
発行者　なか伝道所／編集委員会（題字 松橋 順）

宣教方針
① 貧しい人々への福音に共にあずかる。
② 地域の問題に関わる。
③ 諸教会に呼びかけてゆく

集会 主日礼拝 日曜日 午前 10 時 30 分より

2024 年度神奈川教区平和集会に参加して

今年度の神奈川教区平和集会は、社会委員会主催で、食える餅としての平和と題して、ミャンマー軍事クーデターへの抵抗運動と現状について、「アトウトゥミャンマー」支援共同代表、日本パプテスト同盟駒込平和教会の渡邊さゆり牧師より講演いただいた。

二〇二一年二月一日ミャンマーで起こった軍事クーデター以降、市民は不服従運動（CDM）を続けてきた。この抵抗運動のレスポンスとして、日本のキリスト者有志で続けられてきた毎週金曜日の祈り会が一八〇回を超えた。

講師の渡邊さゆり牧師と参加者

平和集会に渡邊さゆり牧師をお招きして

小笠原敦輔

私はこの春から教区社会委員に加えていただきました。その委員会で、平和集会講師として、真っ先に推薦させていただいたのが、渡邊さゆり牧師です。

渡邊さゆり牧師は、マイノリティ宣教センター共同主事などで地道な活動を続けておられながら、「アトウトゥミャンマー（ミャンマーと共に）」支援共同代表として、毎週金曜日午後九時から毎回八〇名前後が集まる祈りの会を取り持ち、ミャンマーにて市民不服従運動で国軍に苦しめられている人たちを支援し、日本へ逃げてきたミャンマーの人たちも支援しています。また、「アトウトゥミャンマー」祈りの会を立ち上げ、毎週金曜日午後九時から必ず実施し、一八〇回を超えました。（私も時々参加しています。）日本政府があたかも国軍をミャンマー政府のように扱い、国軍によって抑圧されている人たちをないがしろにしている中、私たち日本に住む者も同罪だと考えます。しかも、クーデターから三年半経ち、ウクライナやガザほど報道されなくなりました。こんな時だからこそ平和集会でミャンマーの問題を取り上げるべきと申し上げたのです。

今回、それが実現し、当伝道所からも多数が参加いたしました。その中で原稿を書いてくださった方々の感想文を紹介いたします。

平和集会に参加して

金丸　千代

ずいぶん前から「アトウトゥミャンマー」という活動があるのは承知していた。ミャンマーでクーデターが起き、アウンサン・スーチー氏が逮捕されたという報道がずいぶん前にあり、ロヒンギャ難民の問題も大きく取り上げられていたので、それに対する支援活動であろうというくらいにしか捉えていなかった。

今回の平和集会で「アトウトゥ」が with（共に、一緒に）という意味であること、また「アトウトゥミャンマー」が軍事クーデターへの抵抗運動であることも知った。

渡邊さゆり牧師によれば、このクーデターはどう考えても失敗だと言う。なぜなら、多くの市民による非暴力抵抗運動が起こったから。軍事政権側に付く警官に花を贈ったり、ミャンマーの「女性の下着（洗濯物）の下をくぐる者は不吉である」という言い伝えを逆手に取り、バリケードに下着を吊るして通れなくしたりしているとのこと。

私見では、この抵抗運動はずいぶん苦戦しているのかと思っていた。だが、「腹いっぱい食えない人が一人でもいるなら、それは平和な社会ではない」から変革すべきだというメッセージ。そして、アモス書五章二十四節の「正義を洪水のように／恵みの業を大河のように／尽きることなく流れさせよ」という御言葉からの引用。加えて「この人たちはかわいそうではない。この抵抗運動は『ミャンマーの復興の準備』である」と言い切る力強さに、希望の光を感じるとともに「アトウトゥミャンマー」の近い将来の勝利を確信した。

最後のほうで、渡邊氏は「祈りをまとう」ことの大切さを強調している。多くの人に会い、ミャンマーのふりかけや「アトウトゥミャンマー」のTシャツを購入してもらったり、ミャンマーからの避難民の方からネイルアートをしてもらったりすることで、多くの人々が祈りをまとっているのではないかというのだ。そういう形での「祈り」もあるのかと感動した。

この抵抗運動は、ヨハネの「私はすでに世に勝っている」という言葉にふさわしい。

纏（まと）う

武井昭代

八月上旬、教区の平和集会に参加いたしました。ミャンマーと聞いて私の小さなアンテナが反応したのは子供の頃に読んだ『ビルマの竪琴』の話を思い出したからかもしません。

様々な支援活動を地道に続けておられる方のお話で、非暴力で抵抗する事の具体例、日常の生活を次の世代にも繋げていくこと、コトバの教育から自立への支援まで相手を深く気遣う気持ちや粘り強さは私の記憶の中の人々の人間らしさと共通しているように感じました。

しかしその活動の原動力が『祈り』であること、それも一人ではなく仲間と共に毎週決まった曜日の決まった時間に、それも年単位で休む事なく続いているというお話に驚いていたら突然『祈りを纏う』という言葉が飛び込んできました！

まとう？その言葉には身体に密着しているとか、離れずにくっついているという感じを受けます。『祈りをまとう』とは寝ても覚めても『祈り』がついて来る？それって祈らずにはいられないという事？

教会で決まった時間に祈りを合わせることはよく耳にするし、私も参加したことはありますが、そもそも『まとう』ほどの熱をもって祈る経験を私はしただろうかと思った時、そんな祈りの集団に属して活動されている方々に改めて圧倒されました。

『祈りを纏う』『祈りにまとわりつかれる』とは祈る側も祈られる側もその真剣さはハンパじゃない事に気付き、私にはとても……と尻込みする思い、祈りの道標を与えられた感謝、そしてその支援活動と支援者の方々への尊敬を込めてカンパの箱に再度手を伸ばしてから会場を後にしました。

「アトウトゥミャンマー」のTシャツ

えーとねー

つくつく法師
えいた（セミって
何食べてるの？）
私（木の汁とか、）
そうた（それって美味しいの？）
えいた（きっと美味しいんだよ）
そうた（そうだね。
オイシー　オイシーって
鳴いてるもんね）

（武井昭代）

平和集会　集会宣言文

本日は、ミャンマーの現状について、軍事クーデター以降、ミャンマー国軍がどんなひどい仕打ちをしても、市民不服従運動が続いてきたこと、日本のキリスト者有志の祈りの会が彼らと連帯し、新たなアクションを生んだことを学びました。

一方、日本政府は、軍事政権であるミャンマー国軍を、あたかも「正当な政府」であるかのように、友好的に対応し、日本に逃れてきているミャンマー難民など、争いの中にある故国から逃れざるを得なかった人々の人権を顧みないなど、目に余る心ない行動を繰り返しています。

このような状況を私たちが変えていかなければ、ウクライナ、ガザ、その他世界中の紛争地域の問題にも向き合うことはできないと思います。戦争は、他人事ではなく、日本も結びついている自分の問題としてとらえていくべきです。

また、日本には、一九五か国の三〇〇万人を超える外国籍住民が暮らしています（二〇二二年一二月一日現在）が、入管法が改悪され、命からがら逃げてきた難民として認定すべき人々に対しては、らくだが針の穴を通るほど難民認定は難しく、実施されない状況があります。ミャンマーの難民も苦しんでいます。

イエスは、最も弱い立場に置かれた人々に寄り添い、生きました。本日のミャンマーの問題は、核問題、基地・自衛隊問題、ヤスクニ・天皇制問題、多民族共生、部落差別問題、社会福祉、どの問題とも、人権、生存権と、あらゆる点でつながっており、三年半前の軍事クーデターから日にちが経ってしまったからといって、私たちが忘れてはならない問題であることは明白です。

本日の平和集会で、改めて、ミャンマーの人々が望む軍事政権からの解放のため、日本政府のかたくな態度を変えさせるため、関心を持ち続け、声を上げていくことを宣言します。

二〇二四年度
日本キリスト教団　神奈川教区
平和集会　参加者一同

風景

神奈川教区、横浜地区の活動から

小笠原敦輔

私は今年の三月に六五歳で仕事を円満退職したのだが、その数年前から、なか伝道所が無牧になり、教区、地区との関係も希薄になりつつあった。この関係を改善させようと、昨年度から、これらとの関わりを持つように心がけた。

まず、連れ合いが体調不調で重荷になっている核問題小委員会の委員長を今年の四月から引き受けた。同年三月に社会委員にもなり、溝の口教会で開催された平和フェスタへの参加、教区平和集会に日本バプテスト同盟駒込平和教会渡邊さゆり牧師をミャンマーの講演での推薦などを行った。また、五月に教区が実施した「リフレッシュ@かながわ」に参加し、福島の五家族と交流し、特に、当初から、医師として関わってくださっている牛山先生との信頼関係を深めることができた。

一方、オリエンテーション委員会も教区の大切なテーマを扱っているため、なか伝道所代表として、連続して出席させていただいている。九月一六日の基地見学が楽しみである。

また、昨年度から、横浜地区委員にもなり、書記をさせていただいている。地区も大切な集会を企画し、実施しているが、私にとって最も意義深いのは、在日大韓横浜教会との合同礼拝である。昨年度は大韓横浜教会で開催し、当時の委員長の中沢譲先生が説教され、今年度は逆に、横浜磯子教会で開催し、李明忠先生が説教を担当される。今年度はなか伝道所の兼務代務者、横浜磯子教会牧師の中村清先生が委員長。昨年できなかった教師会も企画されており、応援していきたい。

なか伝道所は無牧でも教区負担金を納め続けているが、教区総会資料も送付されない状況もあった。最近は、教区総会に私が陪席するようにしている。しかし、小さくとも一教会として意見が言える場がないのは、やはり、おかしいと思っている。

使信（ししん）

「キリストの福音・キリストの教会」

ガラテヤの信徒への手紙一章六～九節

元藤沢ベテル伝道所伝道師（無任所教師）　河口陽子

キリストの恵みへ導いてくださった方から、あなたがたがこんなにも早く離れて、ほかの福音に乗り換えようとしていることに、わたしはあきれ果てています。ほかの福音といっても、もう一つ別の福音があるわけではなく、ある人々があなたがたを惑わし、キリストの福音を覆そうとしているのにすぎないのです。しかし、たとえわたしたち自身であれ、天使であれ、わたしたちがあなたがたに告げ知らせたものに反する福音を告げ知らせようとするならば、呪われるがよい。わたしたちが前にも言っておいたように、今また、わたしは繰り返し言います。あなたがたが受けたものに反する福音を告げ知らせる者がいれば、呪われるがよい。

（ガラテヤの信徒への手紙一章六～九節）

この手紙は使徒パウロがガラテヤ地方の諸教会へ宛てた、回覧版みたいに回し読みされる手紙。でもその内容は激しく論争的で「闘いの書簡」と言われる程、切羽詰まった迫力、厳しい言葉が満載。ガラテヤの教会といっても信者のお家に集まる家庭集会の様な「家の教会」。敷居が低くて堅苦しくなく、ざっくばらんで解放的、そんな「本来の教会」らしい伝道所が初期の教会の在り方、信仰も、引き継いでいる、貴重な教会ではないかと想像します。

もう8年前になりますが、私が藤沢ベテル伝道所でこのガラテヤ書の講解説教を始めた頃も、ガラテヤの家の教会が、丁度ベテルのような感じだったのかなーと思いを馳せたりしました。その家の教会の飯塚先生はいつも「説教で福音を語る事」を強調され、ご自身も常に「福音」を語って下さいました。「何々を守れ！」とか「〇〇をしなければ恵みは来ないぞ！祝福はないぞ！」などの脅しみたいな言葉も、「ご利益的」な「条件付きの恵み」とか「自力本願的」な福音ではない「偽りの福音」は、決して語られませんでした。

パウロもユダヤ教の律法を押し付けて「これを守らなければ信者の資格はない！」とは決して言わなかったのです。それはパウロの伝道は「異邦人伝道」だったから？民族も習慣も違う異邦の地という障壁があったから？

布教し教えが広まるには、法然が伝えた浄土宗、「南無阿弥陀仏」と念仏を唱えれさえすれば極楽浄土に行けるとの教えのように、だれにでもどこでも受け入れられる教えの普遍性は必須。臨機応変と言ったら言い過ぎかもしれませんが、「福音は『割礼』『律法遵守』によらないんだ！」と、、この事は「割礼」と「律法遵守」という「ユダヤ人の根幹」ともいえる、ユダヤの人々の民族のアイデンティティをも超えてしまった大転換だったのです。

その柔軟性、包括性がローマの抑圧下にある人々に「解放」の「喜び」を生み、何ものにも縛られない唯一無比の主柱、「イエスの福音」をパウロは各地を巡って宣教していくごとに、布教するパウロ自身が一番身に染みて、支えられたのではないかと、、、だから妨害されたり投獄されたりと実に困難極まりなかった彼の宣教活動を貫き通せたのではなかったか、と私は思うのです。

ところが、恐らくパウロの2回目のガラテヤ訪問の後に、彼に敵対するいわゆる「ユダヤ主義者たち」がこの地方の諸集会に入り込んで来て、「パウロはイエスの愛弟子、直（じき）弟子ではないから使徒とは言えない！」とか、「直弟子たちのエルサレムに依存している従属する立場だ」、「だから割礼も律法遵守も当然だ！」とか、「神から与えられた掟である『律法』を守り通す我々ユダヤ人伝道者こそが本当の使徒なんだ！」とか「神の民を守る神との約束、『律法』を守るからこそ神から祝福を頂けるのであって、そのシンボル、旗印の『割礼』を受けなくていいなんてとんでもない！」、「『割礼』という『しるし』がなければ、他との区別が、差別化ができないじゃないか！」、「キリストを受け入れればだれにでも福音は訪れるというような、そんな中途半端な福音なんて偽物だ！本当の福音ではない！」、「律法のかなめ、『割礼』を受けた我々こそが、完全で完璧な福音、『正しい福音』を伝える使徒なのだー！」とか、ガラテヤの教会の人たちを惑わす様な物言いをして、信徒の人たちをすっかり攪乱（かくらん）、混乱させてしまった、、、

そんな大変なことが起きているとの情報が入ったおそらく第三旅行中、たぶんエフェソ?でパウロは、「この私パウロが体調が良くないのに、頑張って、一生懸命、本物の福音を宣べ伝えてたのに」とか、「ガラテヤの地に教会が何か所もできたのに〜、なんてこった―！」と自分が築き上げたという思い入れがあれば尚更(なおさら)、悔しいやら、情けないやらで、きっと行けることなら「すぐに飛んで行きたい！」そんな感情に捕われたのではないでしょうか?、、、事情は分かりませんが、その時にパウロには何かどうしてもすぐには行けなくって、パウロはこの手紙を口述筆記させ(自分が言ったことを誰かに書かせ)て、この手紙をガラテヤの諸集会に集う人々に届けさせたのです。

キリスト教と言ってもまだユダヤ教の一派に過ぎなかった時代、本流であるユダヤ教からすれば「割礼」は正しいユダヤ教徒である「証」。ですがパウロから見たら「割礼を強要」する事は「信仰の本質」を見誤まらせ、教会の信徒たちを翻弄し、惑わす、間違った主張であり、間違った福音。「私パウロが伝えた『キリストの福音』だけが正真正銘、本物の福音なのだから」と、、、

パウロは元々は生まれて八日目に割礼を受けたユダヤ人、律法に最も厳格なファリサイ派の一員。「ファリサイ」とは「分離」「分ける」という意味、復活のイエスに出会って一八〇度生き方が変わったと言っても、かつてのファリサイ派としてのパウロのその身に染み込んだ根幹の所は抜け切らない、、、「割礼」を強要する狭い教義を「それもよし」と受け入れる事は「キリスト信仰」の「包括性」を侵食されること。新緑の若葉が虫食い状態にされて、育たない、大木に成長できない、みたいに、とても共存は考えられなかったのだろうと想像できます。でもそれは、振り返ってみると、パウロがまだ復活のイエスに出合う前のサウロだった時、キリスト派を信奉する者たちに対して、「ユダヤ教が侵食される、崩される、ダメにされる」と恐れ、「神の冒涜」という理由で迫害していった以前のパウロの姿と重なってしまう、同じではないかと、、、

パウロはきっと、「私パウロが、真の宣教者たる私が『キリストの福音』という本物の福音を今一度しっかりときっちりと伝えなければ！」という熱い熱い思いだったのでしょう。「福音」を「割礼」というユダヤ教の「律法」という枠の中に留めてはならない！矮小化してはならない！と、、、

「キリストの福音」はパウロが信じてきた正統派ユダヤ教の「律法主義的」な厳格な教義・教理をも超える、もっとシンプルでかつダイナミックなものなのだ！という確信があった。そのパウロの情熱が、自分の信じる「福音」のゆえに「闘うパウロ」の姿が見える様です。

それゆえでしょうか?パウロは仮に、譬えとして言っているのではありますが、「私たちであれ、天からの御使いであれ、私たちがあなたに福音として告げ知らせたことに反することを福音として告げ知らせるとしたら、呪われるがよい！」と述べています。

この新共同訳聖書の「呪われるがよい」は、岩波訳では「呪いあれ！」、、、八年前の私はこの箇所での説教準備、取り組んでいた時に気持ちが悪くなったりした程、どう訳されても「呪い」なんて言われたら嫌―な感じ、気持ちは下がる、受け入れられないですよね―

申命記二八章でも「祝福」と「呪い」と詳しく書かれています。聖書学者の太田道子さんの解説では、「呪い」と訳されているけれど、元々の言葉、原語のヘブライ語のその言葉は、日本語には当てはまる言葉がないと、、、

「祝福」とは「神に与えられた命を全うできること」で、「呪い」とはその命が「全うされないこと」。その意味に当てはまる日本語がないので「祝福」と「呪い」との日本語にするしかなかったみたいです、、、そうだとすると、パウロが放った「呪われよ」は憎しみを込めた呪いの言葉ではなくって、むしろ「そんな事をしていたら命を全うできなくなるよ！」との激しい警告の言葉だったのではなかったか?と思えて来るのです。

そんな「偽の宣教者」の言葉に惑わされていたら、「せっかくできてきたガラテヤの教会が、その教会の歩みが全うできない、存続できない。『イエス・キリストの教会』、『真の福音に立つ教会』として成り立たなくなってしまうぞ！」との教会へ対する鋭くも愛ゆえの叱咤激励の言葉ではなかったかと、、、

いわゆる旧約聖書の時代、預言者が何度「立ち帰れ」と神の言葉を叫んでも、変わらなかった祭司など宗教(＝政治)指導者たちに激怒した神、、、なぜ神は激怒したのか?、、、

それは奴隷状態から救い出す神「ヤーウェ」ではない「私利私欲」、「自己の利益拡大欲求」を叶える神ではない「他の神々」に心変わりして道を誤ってしまった事に、烈火のごとく激しく怒る「激情の神」。だからこそ、その「情熱

の愛」ゆえの激しく厳しい、神の叱責の言葉の数々、、、「呪い」と訳された言葉もそんな神の、同じく激しく厳しい愛、愛情から出たのではないかと、今の私にはそうに違いないとさえ、思えてくるのです。

神から創られた私たちは自由を与えられ、何ものにも捕らわれず、お互いに自由な存在として尊重し合い、解放される「福音の自由」とその喜び、「律法を包み込む福音」を伝えて行かなければ、、、違いを否定、排除、罰するのではなく、「違い」は「神の恵みの豊かさ」、認め合う度量が教会にも牧師にも求められている。「問題ばかり」というのがそれこそ教会！多種多様な個性ある者たちの集まりですから、、、

イエスは「罪人とされた者たち」に寄り添い、共感・共苦し、「これでいいのか？！」と。そこから発信し、考え直すことを、奢(おご)った上から目線の律法主義者や宗教指導者、宗教的権威者を正そうとしたのではなかったか、、、

「福音は自由だ！」「律法が福音を否定してはならない！」「福音が律法を包むのだ！」との飯塚先生の言葉が思い出されます。

イースターを終えて、今年は特にエマオ途上の失意の弟子二人の歩みに、復活のイエスが寄り添い、聖書を語り合い「心は燃えていたではないか！」と元気と生きる勇気を貰った復活の出来事が身に染みます。そんな心燃える信仰生活、教会生活になるよう、私も同伴されたいし、同伴する者でありたいと思うのです。信徒の方々も牧師の癒しの説教を有難く受ける、そんな受け身ではなく、一緒に歩みを続ける同じ能動的な同伴者。プロテスタントの醍醐味は万人祭司なのですから。

「今こそ宗教改革が必要、ルターになれ！」と北村慈郎牧師を鼓舞された飯塚先生。牧師は強権的にイエスを殺す宗教的権威者になってはならない。マジョリティー(多数者)に「尊厳」を奪われるマイノリティー(少数者)、「殺される者の声」を真摯に聴かなければならないと、、、そして私を含めて人を差別する浅ましい心、時に加害者になってはいないかと常に我が身を振り返らなければと思わされます。

教会は弱く小さい者たちが軽くあしらわれたり、おざなりにされたり、傷つけられたり損なわれる事なく、聖餐も含めて排除される事なく、一人ひとりが神に創られた欠けた器だからこそ尊い存在であって、一人では生きられない。認め合い、互いに補い合って生かし合う、豊かな教会となっていく、、、キリストの「豊かな福音」を感じられる場になるよう、これからも集う友と共に歩みを続けたいと思うのです。

（二〇二四年五月一九日）

なか伝道所支援献金の
お願いとご報告

皆様からご支援をいただき、心より感謝いたします。ここに二〇二三年度の年間報告、二〇二四年六月までのご報告をいたします。

二〇二三年度
支援献金（二月分）
六角橋教会、藤沢教会
総額　一七、〇〇〇円
支援献金（三月分）
紅葉坂教会、宮崎祥司、
坂井昭彦、大久保徹夫、
渋谷淳子
総額　三七、〇〇〇円
年間総額　二七九、五〇〇円

感謝して、ご報告いたします。

二〇二三年度支援会報告

収入	
前年度繰越金	四、八四八
支援献金	二七九、五〇〇
クリスマス献金	一三五、四〇〇
利子	〇
収入合計	四一九、七四八
支出	
振り込み負担金	七、七一八
通常会計へ	三七五、三八五
その他	〇
次年度繰越金	三六、四四二
支出合計	四一九、七四八

二〇二四年度
支援献金（四月分～六月分）
横山潤、横浜港南台教会
（一年分）、八重樫恵理子、
中西澄子、高畑靖子、
吉田恵美子（以上敬称略）
総額　六八、〇〇〇円

感謝してご報告いたします。

雑感　一二五号をお届けします。今回は教区平和集会についてと河口陽子伝道師の使信を掲載させて頂きました。ご感想があれば、なかだより編集委員までお寄せください。敦